

まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室
助教授 檜田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

1

平成17年度の檜田ゼミ(4年次生4名、科目等履修生1名)では、エスノメソドロジー(養護老人ホーム内相互行為分析、就職相談室内相互行為分析)と、広い意味での福祉社会学(嗜癖研究、セルフヘルプ・グループ研究、生活保護研究)をテーマとした研究活動をおこなった。3年生がいなかったため、後期は研究発表を中心としてゼミ運営をおこなった。徳島大学総合科学部人間社会学科の特徴は「4年次にもゼミが成立する」ところにあると思っているが、その本学のなかでも目立って作業量・思考量の多い研究成果が得られていると言えるのではないだろうか。また、この論文集に掲載された諸研究が「青春の思い出」的センチメンタリズムをほとんど持っていない点も我々が自負しているところである。「こんなに努力しました。結果はともあれ努力をほめて下さい」という甘えのない、あくまで「学問的成果が得られているか否かで勝負します」という態度・志向性のもとで、4年間の学生生活の締めくくりがなされているように思うのだが、読者の皆様の読みではどうだろうか。忌憚のないご批判を頂ければ幸いです(上記電子メールアドレスへどうぞ)。

なお、最近、学部生に対する研究指導のあり方に関して多少思うところがある。その点について少しふれておこう。大学が大衆化する中で、そして、大学の知の威信が低下する中で、学生に研究へのモチベーションを持ち続けてもらうための新しい方策が必要とされている。これは確かなことだ。そして、その有力な戦術のひとつとして「青春の思い出としてがんばれ」と促す路線が存在することは否定し得ないことだろう。学生は教師からの影響よりも友人たちからの影響を大きく受ける存在になってきており、その時「青春の思い出戦術」は有効に働くからだ。けれどもそれでよいのだろうか? と私は思うのである。徳島大学社会学研究室では、学生に調査をすることを強く勧めている。学生が理論より対象に関心を持ちやすい傾向にあること、徳島という土地が調査に有利であること(住民の方に大学の研究に協力しようという雰囲気はまだ残っていること)がこの我々の方針の背景にある。しかし、この「調査誘導路線」を「青春の思い出路線」と組み合わせると、「探検家的研究」、「ジャーナリスト的研究」に流れやすくなる傾向が出てしまうのではないだろうか。そうなることを私は危惧する。「こんな珍しいことを発見しました」という「探検家的研究」、「こんな世の中に役に立つ主張ができました」という「ジャーナリスト的研究」に流れてしまうのでは、せっかく大学にきて、学問と結びつけて調査をする意義がないと思う。そういう方向の研究では、大学でしか身に付かない知的能力の錬成に役に立つことが少ないからだ。普通には「発見」といえないことを「発見」として主張する「知的な構想力」を鍛えること、普通には「有用」と思えない主張の「有用性」をデータの中に模索する「知的な忍耐力」を育むこと、これらのことこそが大学でなされるべきものはずだ。本冊所収論文でいえば、例えば2番目の佐々木の研究は、普通には「発見」と言えないもの(中途半端なダイエットとスポーツジム通いを継続している中年女性による、いいわけ混じりの曖昧な理由付け)を、バランス感覚に富んだ、やり過ぎにも、あきらめにも陥らないための「人生の知恵」、「新しい秩序=嗜癖*」として「発見」している。この「力わざ」をうらづける知的構想力こそ、大学で身につけるべきものではないだろうか。また、1番目の林の研究は、普通には「有用」と思えないもの(養護老人ホームにおける高齢者の奇妙な自己呈示、すなわち、爪を切ってくれる施設職員に対して、血が出るまで深爪をすることを許諾するという無茶な寛容さの表示)を、施設収容者の誇りの表示として、何も持たないものの「身体」を賭けた「矜持」の開陳として見いだしている。このようなそれこそ「無茶」な主張をなんとか説得力あらしめようと手を変え品を変えデータをいじり回す、そういう知的忍耐力こそは、大学が養成すべきものではないだろうか。他のゼミ員もここで書いたような質の知的訓練(知的構想力をもったテーマ設定、知的忍耐力をもったデータ処理)は多かれ少なかれなし得たと思う。掲載論文のすべてが論文としての完成度が高いわけではない。それは認めよう。しかし上記のような質をもってはいるのではないか、それゆえ、少なくとも大学教育の方向性に疑問をもって迷っていらっしゃる方々には、熟読吟味に値する、参考となる諸論文にはなっているのではないかと、そのように愚考して推薦する次第である。

慣例に従い、扱ったテキストを列挙する。輪読した論文と副読本は以下の通り。

- 1) フロイト 1940『精神分析入門(正・続)』人文書院(第一部錯誤行為中の第1講序論と第2講錯誤行為の部分のみ)。(※知的構想力の例として)
- 2) 天野武 2004「リストカットにみる自己確認と自己表出の身体への転位」 in 『現代社会理論研究』14号:318-330。
- 3) マイケル・リンチ 1997=2000「コンテクストのなかの沈黙」 in 『文化と社会』第2号:6-36。
- 4) 福重清 2004「セルフヘルプ・グループの物語論的效果再考:「回復」することの曖昧さをめぐって」 in 『現代社会理論研究』14号:304-317。
- 5) 秋葉昌樹 1995「保健室における『相談』のエスノメソドロジー的研究」 in 『教育社会学研究』57:163 - 181。
- 6) 岡田光弘 2005「身体の動きの表象を『自然に』読むということ:エスノメソドロジー研究によるテキスト分析」 in 『メディアとことば』2号:136-157。
- 7) 石川洋明 1988「自意識の悪循環過程をめぐって」 in 『ソシオロギス』(12):100-115。

なお、授業期間を通じた副読本として、山崎敬一編 2004『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、山崎敬一・西阪仰編 1997『語る身体・見る身体』ハーベスト社、好井・山田・西阪編 1999『会話分析への招待』世界思想社、上野直樹『仕事の中での学習——状況論的アプローチ——』東京大学出版会、および、サーサスほか 1989『日常性の解剖学——知と会話——』マルジュ社などをつねに参照・利用した。

本ゼミ論集は、そのタイトルを『生活の中の相互行為』としている。ひとつひとつはみずからの生活自身をとてめ緻密かつ詳細に組み立てて、秩序化している。その様相を捉えるべく5人のゼミ員は1年間努力した。調査が計画通りに進んでいないことを叱責したこともあるが、結果としてはいずれも「調査に

基づいた」「学問的成果」をあげ得ていると言えるのではないだろうか。なお、編集に関しては、まず第1部と第2部を分け、第1部を論文篇、第2部を「50音社会学」篇とした。第1部の内部では、その前半にエスノメソドロジー的研究、後半に福祉社会学的研究を置くようにした。冒頭の林論文から読んでいくとエスノメソドロジーに関しての基礎知識がない方にも読めるように林論文の2節は若干丁寧に書かれている。次項ではこの編集順に簡単な紹介をすることとしよう。

2

以下全掲載作品について、編者としてのコメントを付し、読書案内としたい。

(1) 林論文（「施設内コミュニケーションの相互行為分析—身体の意義に注目して—」）について。
上述したように、この論文は「一見意味がなさそうな発言にも意味がある」という主張をデータ処理を工夫しながら論じた論文である。精神病院に、職員の添い寝等の「タッチシステム」があることは広く知られているが、ここでは、老人保健施設に「身い切ってええでシステム」と呼べるようなシステムがあるのではないかと、という仮説が呈示され検討されている。爪を切る/切らせるという関係では、爪を切る側が一方的なサービス提供者となっているように見られがちだが、身体侵襲を許容する程度を上げる、という方略によって、「被サービス提供者」である「収容者」もまた一種の「サービス提供者」（すくなくとも配慮する者）になりうる。このような逆転がどのように受け入れられているか（あるいは受け入れられていないか）という研究はまだわが国ではほとんどなされていないのではないだろうか。施設内人間関係を、施設職員をあらかじめ権力者と決めつけて分析する類の研究では見えてこない、より実態に近い施設内秩序の様相を発見した研究として評価できるものになっていると思う。

(2) 佐々木論文（「『自己コントロール』の成功としての嗜癖*—理論的考察および若干の経験的例証—」）について。

佐々木の主張は、ガーフィンケルの主張とパラレルである。エスノメソドロジーの創始者H.ガーフィンケルは、平和だけでなく、闘争状態もまた「秩序」であると主張した（ガーフィンケルの博士論文である『他者の知覚』を参照せよ）。そして、「安定している」とか「落ち着いている」という質がない状態であっても、そこに参与者の場面理解の共有がある状態を、「秩序*」（*は、アストリスク）と名付けた（と記憶している=今手元に資料がなく詳しく述べることはできない=）。佐々木の「嗜癖*」も同じような論理操作の結果得られた概念である。すなわち、「嗜癖」の要件から「本人も困っていてやめようと思っている」という質を除いてもなおまだ「嗜癖」と言えるのではないかと考えているのである。そのように考えたとき、当該の「耽溺」は「嗜癖*」と呼ばれることになる。この「耽溺」が単なる「習慣」とどこが違うのか、に関しては本文を読んでもらうしかないが、あり得る主張ではあると思われる。少なくとも、なされてよい「テーマ設定」であり、このテーマがインタビューに基づいて「例証」されようとしていることは、やはり高く評価してよいのではないだろうか。

(3) 正島論文（「セルフヘルプ・グループを運営すること—ある心身障害児家族の会を例にして—」）について。

本論文は、とりあえずは、リーダーシップ論として読まれるものである。ある心身障害児家族の会の有能なリーダーAさんのリーダーシップによって、この組織はその潜在力を十全に発揮し、地域での有力かつ有名な団体に組織を育てている。そこでは、メンバーとなっている子供たちの障害の種類が雑多であることもまた活動の力とされ、業務が役員にこなされきれない程多いことは「全員役員制」という活動民主化の根拠とされた。しかし、そのようなリーダーシップがどのようにして発揮可能となっていたのか、という組織文化論に展開していく内容（その種子）もまた本論文の中に含まれており、そこもまた評価されてよいだろう。同類の他組織との関係や保健所との関係などさらに探っていくべき今後の研究の方向に関する指針も読み取り可能であり、将来の発展可能性のある論文になっていると思う。

(4) 田中論文（「就職支援室における相互行為分析—」）について。

これも多面的に読める論文である。純粹にエスノメソドロジー研究として、場面をいかに終わらせるかの研究としても読むことはできる。けれども、もうすこし一般的社会学の課題に惹き付けて「複数課題がある場面を人はどのようにして生きているか」という研究としても読むほうがおもしろいだろう。就職支援室の2つの課題、すなわち「訓練をして、学生の対人コミュニケーション能力を高める」という課題と「慰めて、今の自分の能力・状況を受け入れてとにかく打って出るように、前向きになるように学生を仕向ける」という課題とは、同時に達成するには困難な2課題である。この2つをどう組み合わせることで現場が秩序だっているのか、それなりの発見がある論文になっていると思う。

(5) 中恵論文（「貧困問題の現代的位相」）について

もし、世帯単位管理から、個人単位管理に、行政の住民管理の仕方が変わってきているとするならば、生活保護の受給者になる、という経験の質もその管理手法の変化にあわせて変わってきているはずである。「格差社会化」が進行しているといわれる2006年の今、この課題に取り組もうとしただけでも評価されてよいのではないだろうか。研究途上で執筆者本人の骨折というような思わぬアクシデントがあり、インタビューの補充等が十分になされていない憾みはあるが、問題提起と構図呈示の意義は十分にあるといえるのではないだろうか。

(6) 50音社会学

12年前に筑波大学で技官という職についていた頃から、「いつかゼミで50音社会学をやりたい」と考えていた。酒席のお遊びに岡田光弘氏（国際基督教大学ほか）とはじめた「50音社会学」であるが、やっていく内に、“このように「いろはがるた」（犬棒かるた）の社会学版を作る作業は、学生の社会学的センスを向上させるのに絶対に有用であるはずだ、”と思われたのである。今年ついに、念願かなって、夏休みを中心としての期間にこの作業を学生とおこなうことができ端的にうれしい。残念なのは、文章作りの中で出た多様な議論が最終掲載文にあまり反映されていないことである。できあがった文章よりもそういう途中の、自らの経験や理解を開陳しあうような話し合いが意味があるし楽しい、というのが私の主張である。来年以降も続けて、数年後には「決定版 50音社会学」を再度世に問いたいと思っている。

=謝辞=

今年もまた多くのかたの助力をえてゼミ運営を行うことができた。とりわけ、立教大学大学院の酒井信一郎氏には、ご来徳の折りにゼミでの長時間討論にも参加してもらい、たくさんの助言を賜った。ここに記して感謝する。